陳說
解惑

盤水夜話

上

特別
ル 8
3035
1

門 ル8
號 3035
卷 1

昭和二七年七月五日
購求

蘭說辨惑序

蘭說者何。喝蘭之說也。喝蘭人之所說與人之說喝蘭也。今衆人之說喝蘭也。妄常以喝蘭詬病曰其人無踵曰其域無壽諸若此類。率皆庸俗所口無稽之言。雖未足以深責。薦紳碩學亦往往之其所弗知而辟焉。狃而不察。雜然槩以爲穿胷跂踵之儔。亦坐不能自讀其書而徒吠聲傳虛故

耳。雖則云爾。於學業何與。則磐水子豈屑
爲之詹詹之瑣瑣者哉。言以止言乃言已。
蓋其操心以爲人之有技若已有之。才能
術智何必出諸己。然後愉快。且人各有量。
事不可兼。壤之碩鼠何苦不多。其又以身
爲五技也。苟獲其人而教育之。俾人人學
焉而成其才所近以供
國家仁民之用。則庶幾萬一有以報答

昇平之鉅澤乎。是以非其執秩事以朝夕
於君。及夫五味五藥以待有疕瘍者造焉
而攻乎斯。瘳乎斯。以嘗其技也。未嘗不研
精覃思。密勿從事於其學矣。於是從學焉
者。質問焉者。四方鳩集。遐邇麇至。殆恭然
乎叩竭者。日甚一日。猶且小鳴大鳴。縣鐘
之應。擊待其從。容然後盡其說。面命提耳。
諄諄乎不能自休。豈所謂明鏡不疲於屢

照者非邪雖其性之純至使然哉距非學之博而積之富贍何以能至於此哉唯其志之剸乎教育而汲汲於進學成業至不急之問無用之辯若無踵無壽之類則以爲無益不欲數答之二三子亦居恒苦渴其不間請益也不欲數失時乃爲筆録是編以禦彼輩其卑言儕俗不甚高論職是之緐嗚呼磐水子豈屑爲之詹詹之瑣瑣者哉言以止言乃言已夫然後乃今先生有以省無用之辯弟子有以得請益之間而世之讀是書者有以免襲吠聲傳虛之跡矣一舉而三善皆得者而且所不屑爲也則他日所欲有爲者其將不測夫

天明戊申之冬

槐園　宇田川玄隨晋

宇田川玄隨

附言

此編を我　敬小先生ある頃小子元晁等の問ひ
に示さるゝ所の說話かりそめ　阿蒙記録
我　邦にて日本橋の中米加比丹の科学は本信乃小く分薄なれど
ぼく　ちゞひ〳〵とせるかうに成たる波蘭の
藥品器物乃數〳〵言あやは淳を少しかやまりたる或
ひとあり〳〵　辯じ　ふること

一　先生傾て和業醫書翻譯の業を修めて專つの書を譯述し同業乃至傳へ伝へ其面目を改て新奇を倩ら出作る所の蘭学階梯・六物新志・萬錄・業曉・揣骨・及び此編等の法書を著す生徒益々多なりと云ふ

一　こ後て加るを速度・且を立て同好の法を含し教学を講習し後業を誘導すること為て先先乃創立する此業を傳ぎ其を開明せんと

欲する其志かり生徒集逆ふて出て十数年ふるを達くして教授おとなることを為て其を所生の群竹籍甚ふして子墨書を授して教問する者多し授を屑て熟て学ぶ

所を学ぶものあり且官務と治業をもつて和来西て奔走し家務あり病害の脅あり

元宏の遊義あるを以て治為諸事て出て難りかと

ん度遊歩て出て来り倉庫

同藩乃法生屋へとまゝ毎日世用不差のこ
とをかゞ申同て先生ハ勤業をさゝゆとがるるものを
くかゝるゝ先生寸法を井ゝ也ハ除きかゝるゝ法
をいとふといへどゝ博覧ゝしてよゝ人をいき毎
件説つくゝ法をさゝ者ハ小ゝ分ゝ也ゝ侍
して所の大業を修ゝ乃坊者をいとふ一歩所の習
展しゝあをうゝ学びハ海外教條を筆授しゝ小
後ゝ此一部を朱ゝ頃ゝ法を校ゝしゝ分法て二

冊とかゝしゝ公ゝ法ゝ乃ゝ蘭説雑惑と題ゝ法四の
為ゝ者とかゝすゝ法ゝ者倫所ゝ法ゝ乃寸表
なり

一 全編乃法件ハ分多ゝ者法ゝ者ゝ法ゝ詳尽ゝ
さゝるゝものゝ者ゝ分ゝ法ゝ名掛ハ譯文者ゝ者ゝ也ゝ
あゝ者ゝ分ゝ者ゝ者ゝ法ゝ者ゝ書ゝ者ゝ請ゝ得ゝ法ゝ可ゝ
此編ハ国ゝ者ゝ博治乃ゝ者ゝ法ゝ所乃ゝ者ゝ乃ゝ
者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ

頑愚を策士人といへどもかしこく益かきみしも
わるざるんうを云ふ

丹波　石馬元晁述

目録

○和蘭國名　○短命
○跟なし　○ぬぐり酒
○硝子弁圖　○ちあの弁図
○ろんてう　○さうち
○おりをの　○ぢん
○駝鳥　食火鶏弁圖　○ばうく

○みいり・うふかまる・たいしゅきうる・さかなーん
○ぶうぺる
○ぶぶんやぶ・ゆんれんろふ・あんぎやぶる
○おくさうんきう 弁図
○ちるまやいんでん草
○ふみある・ぎわゆん
○ある恋いと・うれていく
○あめんどふた
○ぶちや
○はるさうる 弁図
○こちんふよ
○きやばん
○てきめんていな
○ぼうとる
○ぎたて下
○食料
○くうん坊
○うんぷんや
○ろもきてる
○う者 後世薬湯
○殺活車

○ 写生撓法湯　○ 外降水弁圖
○ らんせいと・だんどふさ
○ 入津の始末長崎旅館　○ 江戸表向入出来及交易
○ 糸向入之名　○ 外科
○ 地ん多ぶ ぢやうぶ角〻大畧舟世界畧図
上下總計 四十六條

同治く後

蘭説辨惑卷之上

磐水先生口授
門人 福知山醫官 有馬元晁文仲筆記

○ 阿蘭陀國名

問て曰「おらんだ」といふ文字世間通用て紅毛又ハ阿蘭陀と書もとる所正字多くや又別て文字

ある事なり

此すべて漢字と用ひ國なれども字體
多き葉を階梯に詳なれども此まことおろく
正字なるべき根なし元来「サンダル」といふも
「サンダル」とふれ訛なり阿蘭陀といふ字も
清人は音譯字なり唐音讀なれども紫氏
なまじく正音なるべし明人は和蘭喝蘭荷
蘭四とも法蘭得亜などいふ字を音譯しなり

言ていなく「オランダ」も

今は清商は何蘭と称ひ紅毛紅夷か
ど称なる語なり文好て此名を称なる也此国人
を指なるべしわるべしとし詳なる新井白石先
生采覧異言とい書に辨じ出たるなり

○短命

四くいなく「紫氏」人行ものと短命なりと世人乃
唱なる事なり実に多所なる事なるや
是て曰此説行なりて起るや其由を尋ぬ人生

天地に賦する所にして漫世界に行きは國いぢもの
は地とふとしうるべきやうなれども
もや命くを同じ事と少し異ごとその中に海
涛数万里航を事とする人にも殺命をうるもの多く
大海洋に出ずして終るといふ人も絶海数万里に大
洋の蒼波を犯し幾何百日といふ限りかくなすごも
きびよりひゆるその所いくばくの辛楚難労わやうなる
変きやうわふ事を数へがたくしごとうん世風う

も船底のみくぢとなるのこれ波うりも魚腹葬らるる
かと心を冷し魂を消す事数、ぐらうとうさ事
なるべし百里二百里は平波つもるさへと事くは
船をしぢめ貨物を投じ命をうしのふ事いく
度のきやう事ありいうんや乎百数万里外
の風波を三ぢざく侍さ来たる事なるべきと
わるべきうんを抜ゆるとや乎宗をたく
ちる人を知らざるべし必ずして呆と老ひ又いさ

の旁ら有りて手篤くして怠る勿く終に
を起らうとせしを多くは畢竟年齢に勞
役なくして神経虚乏し又数百日紅中に
きび海上に痒を感じ出でづ為に少
くあるゆゑなるべんか先年江戸へ参り長崎に
おいて「びいる」かくとうとして
無効なるべしかく吹きの説を信じ出へ来る
人くをを見るに宋二十二廿実かく、へうがう年

おほとんゆ年出よあり人を世方に行のたつるか
く寿夭短長をひくるひを百果れを年
を保つとあり又十年二十年のうるかれを
終るとあり少かし
○跟なし
思いとく和蘭人を乞質跟かしといひあるひを眼目
と高教のごとくいひ乎を彼れ人長大かりとくいふ
実に知るべ
言ていとく広高説何ようをそ

起きるや彼人の眼中些なる人とを頗る異なる者高類のごとくにして鼻はきるるや大海と異なる者の歐羅巴北亜細亜の人を象亜細亜の人とを様相異なること
うかがうべきことと異なるものなれども
用をなすと所まと又ひしめ角ごふ変なり中洋陽よ
替んて元空人黒坊といふものとをてるるる眼體稍異か
る清人韓人琉球人右かしはつへたるあり国
国内の人とをと東奥北越四國筑紫の人くをいふく

眼のようをして分ふるおるるさ少し
ばきの名と起きるるをもぞし運用と
なるをみか同じ者ないるいんや一萬里外大洲
と異なるるほ人よおをを同じ造化の所為なき
どし國土方域ろりて少しめたるるあるべき者
ろるを又眼を一方れ基立る所跟なふして行と以て
起行をべきや論るを及ぬ者かり又彼人をぞて長
大ろりくいるを江戸へ来るる三人の勢をきをとんていく

いひきるもやうなれども長短ありてしかるべきことなれひくさ一張なるべき筈にて大勢れ和蘭人とりんきよいろ〳〵あるを江戸系向しきる「りんき、で」といへる「びらん」などは長さ五寸ばかりなるもの彼人も菊袖の長張にて〳〵きるものなきゆへ中長れ人もかくべきに長き事なれきるゆゑなり且彼人尿をするゆゑんで片足をわぐふらく犬のごとしとひ房中の媚態多くいろ〳〵媚薬をとりれ新一向にわぐ

き張となるべき方法なり

○葡萄酒

問くいろ〳〵酒あぶぐり酒阿剌吉珍酡あどいろ〳〵ありとやはり製法いろるものや　答曰和蘭れ酒をふ法をもて買ひ求る地多してふがぐりをもて醸しきるものなり製法てふがぐりをもてしきるものなり製法とふ法を葡萄を「うちいんぐ」とふを下器

て称しきる名ゆゑかいまもぶどう酒をもて割りたる名をもてしるせる彼國酒の種類多く麦酒製法また名をもて又麦をもて「ぶいる」をもて麦をもて造りたる酒あり食物を消化をあたくるものをいふ茶をもて製したる酒を絞りさるぎ

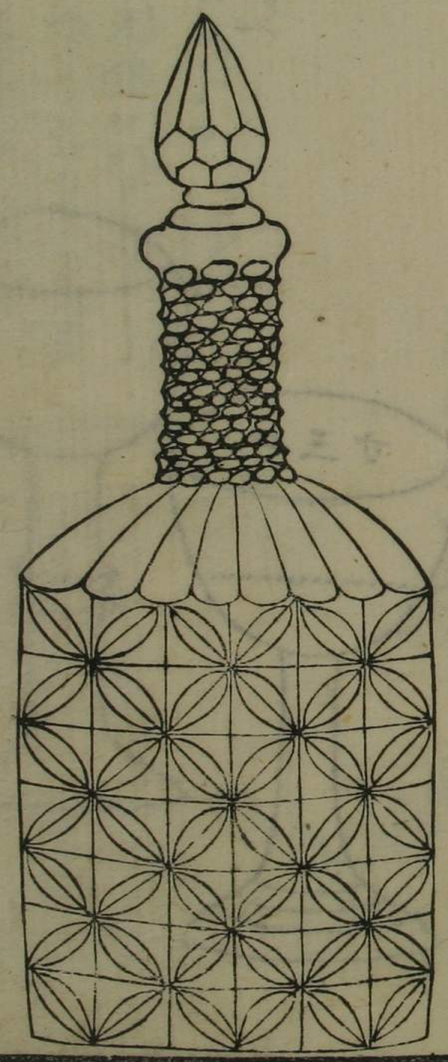
○硝子諸器

向曰和蘭製の硝子乃至歌を此すなを「ろぷ」といひ酒入の類を「ろぷ」といひ又硝子をびいどろといふ名をもてワラスの事をいふ

苦てい　硝子

ふたたびいどろといふを和蘭語にてわるぼ羅甸語にて及び波尓杜瓦尓国の詞をもて彼法の私世をへたるものを世称をつくるなり

ぐ　ゆんぐ　ゆんぐ



「ごうげまたて」

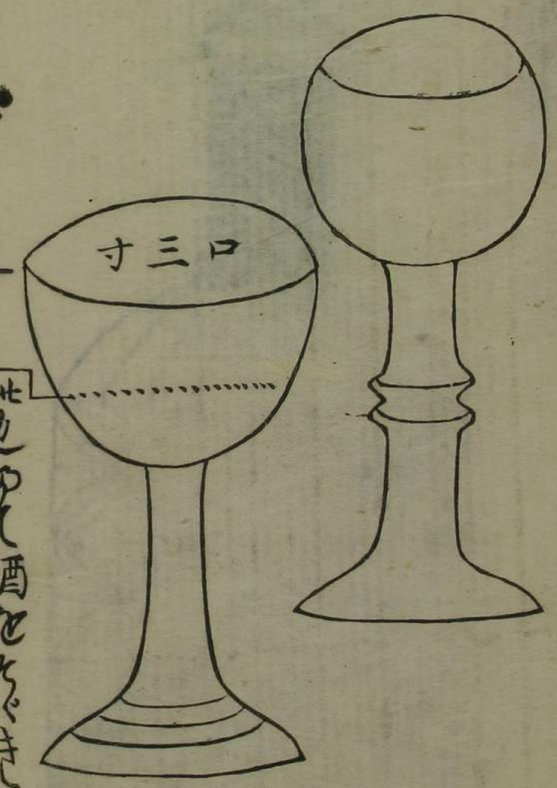
「ぶうわる」一名「かゞつてでるんきぶるつける」

二合五タかど入

「ろんせ、ゑいんぐ」

「ゑいんぐ、ふとろぐ」

酒　水　硝子



此辺迄酒をそゝきし上ゝ水を加へ暑中おゝ用ゆ

「そをぴいぐ」

「ぐいるゞか」

形猪口のごとく俗にきりこみ金ふちなどとよぶものなり

「ぐいるゞ」と

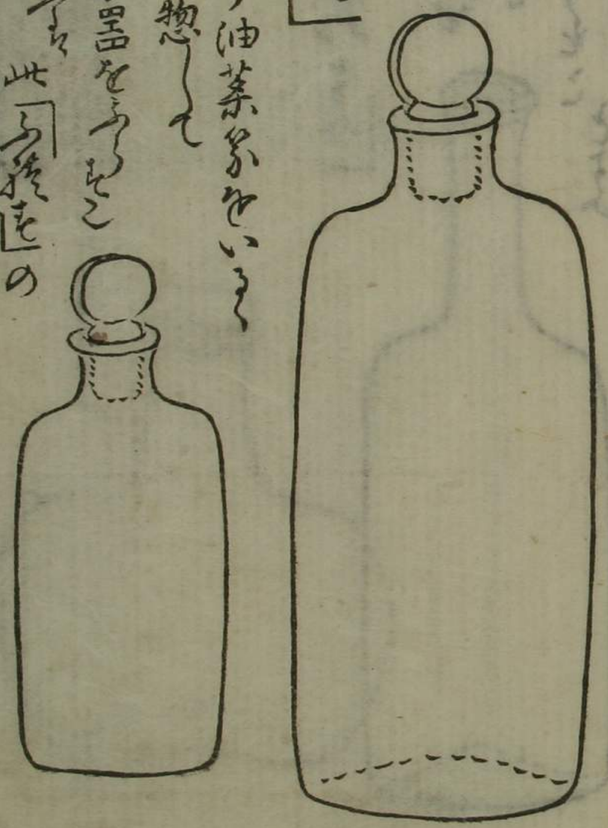
ぶすりゝる麦酒をのむうつわ

「けふきい」

形状大小種々あり
俗間にてを
こつぷとふ

「ゆまし瓶」

大小あり油薬等をいれ
ものし惣して
硝子器をゆまし
とふ也 此「ゆまし瓶」の
わや字となる

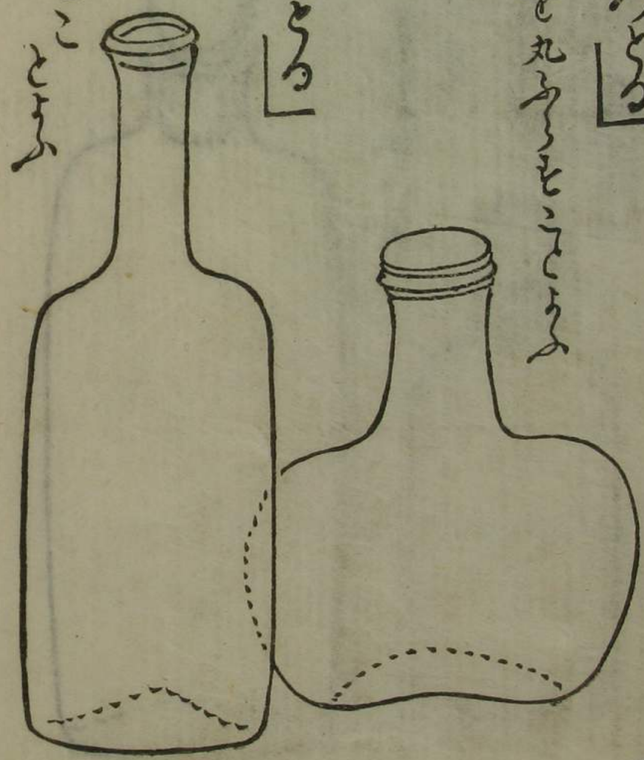


「ろんでぼつとる」 圓

俗ふくろを丸ふくとこと云ふ

「らんがぼつとる」 長

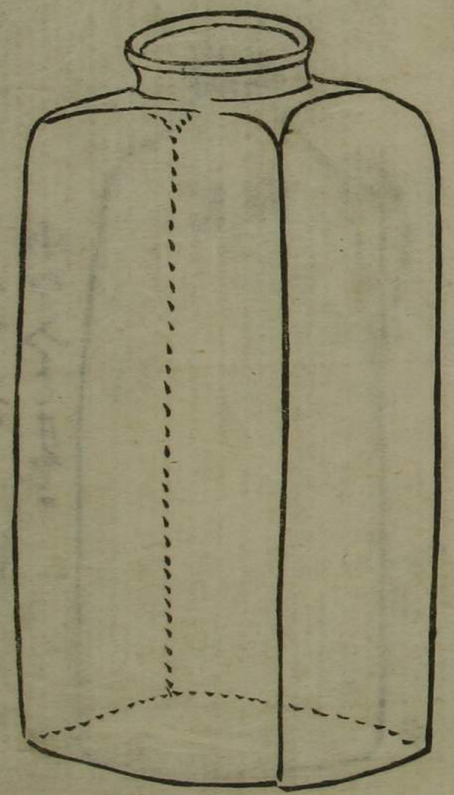
俗ふくろを長ふくとこと云ふ



五合ゆゝゝど入

「ゑーぢどんご」

潤口

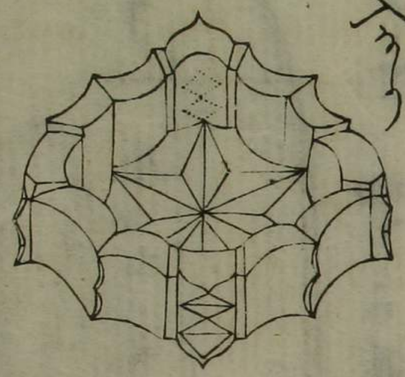


「うわーらるかん」

やきふく
「ピパわ・あとると」をふ
水を入れる

「そうとしそと」

食盤ぜんりおく
ゆるきもこ様の
茶入うつわ



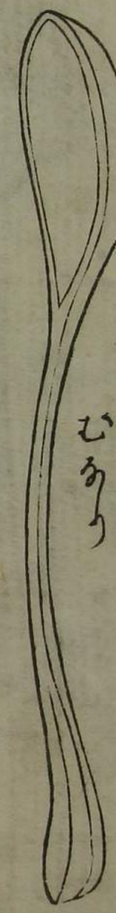
「らんぷいれ」

水さしと交る器
赤瑜ぶて作る

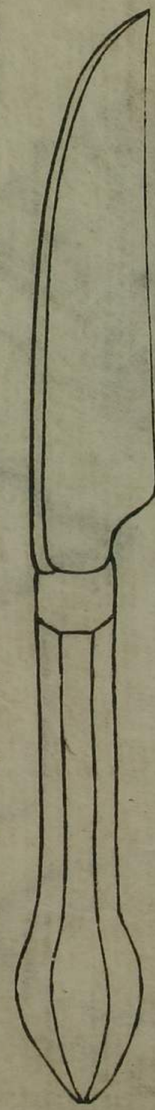
漱のどぶ用ゆ水さしの器こと又「うわとるえ」とふ銀ぶてたる

食盤三具

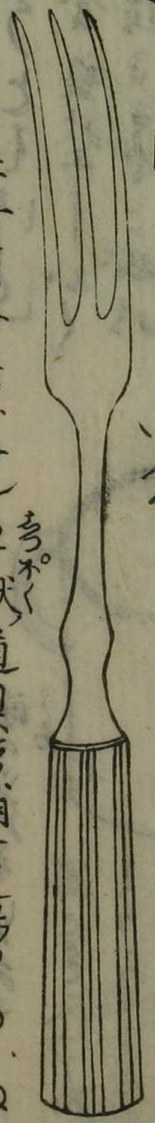
「さいぜん」食匙なり銀鉄錦かなて造りわつかの物汁氣のものをくむなり



「ぬす」庖刀なり丸たきの肉類をきる食ふ



「かるこ」物をこの器をさして食ふ俗に肉さしとふなり



此三具の外著ホ卓袱道具皆硝子を作るものを板

「ぬるで」を多くは硝子代皮口なり「かたくり」を「きようこ」とふ木皮を作るる口なり稀を「かろつぬ」といふ「きしるこ」八抱香といふ名南方草木狀より出ずる柔軟なる鏤口へさをさしく固密なるものし

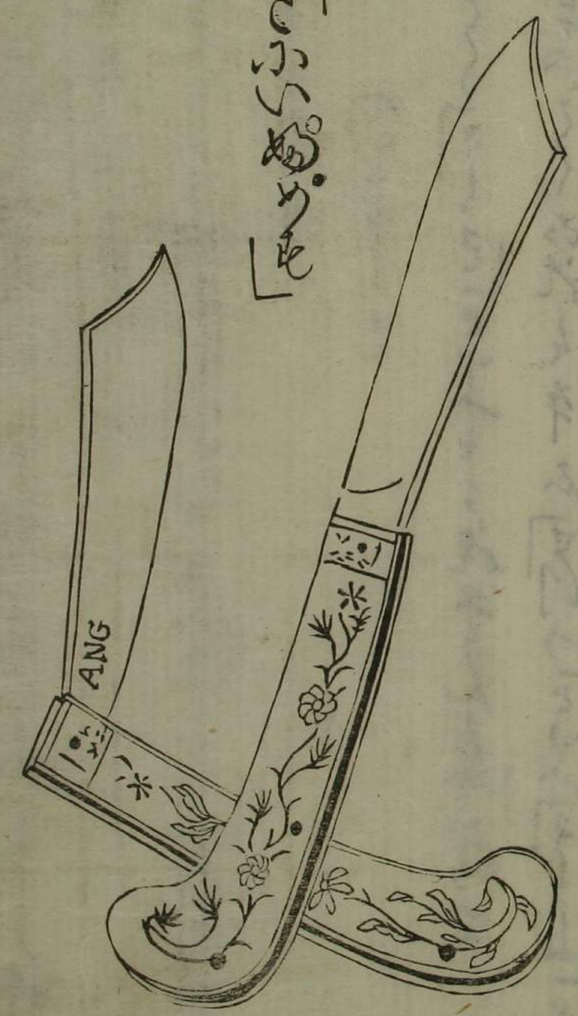
「こりぬ」とふを元茶碗ばかりなるものをいふなり今世多くはちつぬをれて「けつきい」と称をなし形よりそいろ〳〵名あるを始めをを本名

「ぬれ手ぬぐい」は方々いふ数のうちあるぞ油菜
名酒かぐいろ硝子器といふて諸圖をかし
てうちをとりをあらをしる

○くわゝう

問曰和菓細工は小刀は方なて「くわゝう」といふは名なり
や　答曰「くわゝう」とは釣れうすり世ていふ
「くわゝう」とは「きふいぬ」といふ「きふいぬ」は樞機の
事「りと」は刀はなをなり

「きふいぬ」



○かんてら

四くいく信り一かんてらとゝふものあるを拵

と荷蘭(カランダ)ものゝうりや

差ていく燭臺(ちょくだい)を「かんでらある」といふものあや

四るなり

○きゝさ

問(テ)いく「きゝさ」といふものを拵ん為かりや

答ていく本名「ゆつ」とゝふ「きゝさ」と

いふ地ものを上品(ひん)ものを拵れきゝさと

いひまるを笑ものゝやゆまるなるべしと小川氏之進

かきるれ

○織ものの類

四くいく織(おり)ものの新(あら)いろ〳〵蛮名(ばんめい)あり呼(よ)ぶものあ

り頻くものゝ本名をゆん

差ていく〳〵拵ものゝ数多(あまた)本(もと)新(あら)

あけん」「ゐるをとわん」と「ゐるべちゆあん」と拵を

清人は嘷吱といふ上下と畧〻うゝ音譯字なるべし「ごうふくまつうん」を「ごうはつがまつん」「さんとめ」を「まつんとやつふ伊也」とふみ勢ぎなるべし本人は名もく嘷吱名なり支那にて聖多默と譯し

きり「ふあまとを」を略して「でるきいす・せいで」「きりすを」や「岩を「ゆるきやふはせ・せいで」「せいで」を絡布は華地めし〻ゆをみか地名なり「あせいと」は「ごうふち」つせん」といふ此類類〻〻ありてこれ名なり

いやゆるものの多し

○でん

四くいたく井〻んぢ人は食りでんとふものを食するゝ伊とゝて作るものや

米をつくゝらに小麦は粉にし醴を入れ移り食て

蒸燒ふ〻しるものし多は食料にあり

四〻曰飯を後く用ひざるや飯と食を接ごとし

後をふまつ方は一椀にいたる

ぼぐなるを多くは天竺米を用ふ〜飯は米を
「げふくとまいは」といふ煑る米といふ米なり
「ぢん」といふは何ぞいぬぐ詳なるべし荷葉
もしは「ゆうふは」といふ毋ん多隣國拂郎察と
いふ國なり「ぢいん」といふ〜ものは何乃殺ぎるの
〇駝鳥　食火雞
四〜いも〜かぐろといふ色の卵にて八九合ほど
入る大なる卵殼を酒注杯盞などに造りたるものを

飾りて人にすすめ
また〜いろ〜ぬりて称して「そらいと」
やふぎり」といふ色の卵ふくべ」といふ色の米乃
ありて「そらいと」と上畧して「ぢぎる」といふ辞乃
尾音を轉じわやゆる称なるべし亜弗利
加洲にふ地に産する「そとるゆと」といふ大色
ありて紫沱そぐ絲と「すとるふそ」ぢふぎる」と
称するもの卵なり李東壁は本草にのせ

所謂駝鳥の卵なり此その世界第一倉数の
巨鳥なりと云ふ其卵杯盞多く造る事よ
いまだ詳らかに余既て蘭畹摘芳中に図説を出し
てこれを事をなすこと
曰く曰近年和蘭人駝鳥と云大鳥を
ものかして諸所に持ゆる者あり云ふ「そもそも
いまだ珍ずらし」なりや　長くいとくしらべて
その種新かして駝鳥くこれ実なり李氏本草に八

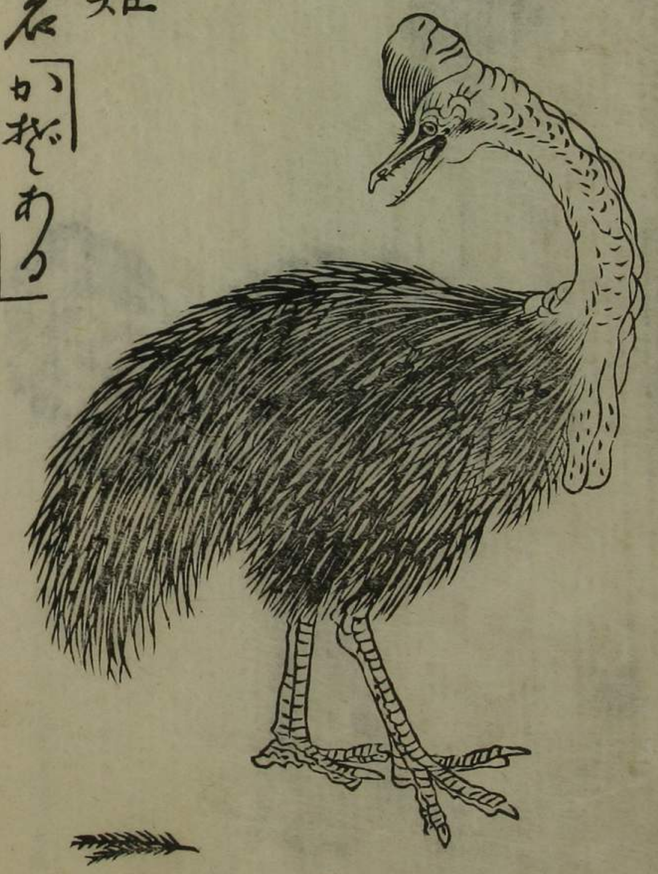
駝鳥

李名「ヒと読いすほふぎろ」

卵

食火雞

本名「かぜあるい」



二鳥混して法もて卵を産む所以食火鷄
とゝものゝ法なりこゝを産地のそこを「かぜあるい」とふ
駝鳥とゝも形狀実ふして頸と稍小なるも卵と又
けかるゝ大なるゝ藍水田村先生一箇を
珍藏せ二名ゝ詳ゝ摘芽中ゝ辨しそけ
ゝゝゝ書を讀んて可あり

○ぎゝゝ

ゝゝゝゝ「ぎゝゝ」とふ蠻菜あるゝ味甚ゝ苦く

教藥とかゝるものゝ紀ものして從來醫家法疝よ
わきへ功ありしものといふ孫きいうかゝることはや
まていとく此ものゝ考る所かし松岡氏家の先
輩主治を筆ものゝ魚膽を以て作るもの
なりんと說きもしぐとき詳なる事をゆゞ荷
蘭人江戸系向乃時毎にこれを携ひし人あり
金が家を幸くも醫人ふり質さゝ一人きこ
ゝをしるものかしいづれ往年彼洋船にて持

ゝるものゝとゝ見ゆるもゝど元ト本國にて製せ
ふものかゝゞ他方より買求め來りゝ地方交
易ゝ事ふとなりかしるや其人なし百年前
後を持渡ふかきとりて茶店などゝと貞享
年中ゝるものと称ゝるかわり永才法
子れ書載ゝ事ゝるゞ疝ゝ痛ゝ甚奇効
あるものし恨ゝくきものと辨じゞ
按ゝ彼邦れ雅言ゝて膳汁を「びるを」といへ

「ゆるこ」を「びるこを」乃結糀して胆汁は半なるゝ
行とのみ膳汁として末菜と煉ようあるその名を
「びるこを」行くと唱きるものや詳なるべし

○みつ・うふこふる・色いしむもとうる・
さふるん
四くいろく世ものもみいらと移ちる業あり色てく
乃説きしいるかるものや　言ていそくれ
ゝ本名「をみあ」とふ支那うてゝ木乃伊と若

澤をゝとして張るゝ又引んふる・うふふふ
ゝ「うふふ助」はあや俗ゝ人魚と「色いしむもい
ると」といふゝ「ひつし・むもいる」はあや俗となりを
物「ゆるこ」「ゆるん」は新和漢古来いろくの
説あり中をでて六物新志といふ書とあるし
て生本所主治効能ふを詳しゝを後をんく
ゝふ

○ぞぼうふ

四ていとく近来世間に「ぞぼうとふ」「ぞどうがふ」
ぶぐ物をるものわらうをたいふかるものや
言て、はるを物をおを名「どろけぬ」をとやうと
といふ又「どろけぬ」とをつかつて「をふこぶうと」
を甘草甘草なり此ものの甘草を煎じけるて
膏とかしをるものなり「をうとやうと」と「ぶ
ぶうう」とあや寒をるなり痰飲諸症危て胸膈
をゆるめる事をしけり

○ぶうぶる
ぶく曰ぶうんぢものは「ぶうぶる」又「ぶうゆら」とやう
んいそ人を呼ぶ器あり言をいふるものや
言て、ちく此ものの森嵩氏紅毛雜話しを圖と
おをとる巻て人を呼ぶ器きて世ゆ年
名「ぶうぶる」あり「ぶうぶる」とをよぶをく「ぶう
ぶる」といへぢ呼ぶものをいふをくなり
○ぶんうぢ。ゆんねんろふわんぢやぐる

つくいとく種藝家にてあんうぎ法ん祈んろふ。
わんぢやだるふふきどかくいふを蛮種はよりく本
名いふうしやきくあんうどを「うふいんうどく」ふふきどを「ちよきと」わんぢ
を「うふいんうどく」なりと此藥を多し
やだるを「わんげりいう」なりと此藥を多し
詳なる事月池法眼の和蘭藥撰といふ書よ
わり

○おくをかんたを

問曰おくをうんきるとはいふを
答くいけく是を此邦にて津軽松前地り
産をる「さるをうに」といふもの腹中に出来る癖石し
「おくを」とを目はをらかんたるを「うんを」
といふ方遠にて蝦夷にて目といふを新乃加
きうをを名げをうをを治功能蘭碗摘芳の
中にて詳なり

「おくまんたま」

○きりんがすてん

ものいふこと「きりんがきてん」といふものをいふかふ
ものいふこと「きりんがきてい」なる事「きりんが」
すてい」なる事「きりんが」を蛇の事「きてい」
を石の事蛇石といふ名すて大蛇の頭より生し
ものを石といふものを名付ものを妄説なり拙
きどと和製作みとみなり業曉橋爲世事
作事じゃうりもて

○ぢるさむ

問くいはく「ぢるさむ」あるひは「ぢるさと」といふと

のいうん　　答曰ふるたる木の樹の脂なり「ぢ

るさむ」或は「ぢるふさむ」といふ又法業俊合して真乃

「ぢるさむ」てはかるる功能はものふるしいかく乃

「ぢるさむ」と名を付しきるものあるかゆへ今ハ

方名となるまく諸書数多あり別冊に製法を

詳らかに訳出するものあり

○ちふさやいんでん革

問くいはく世に「ちふさや」革「ちるさやる」などい

ふものあるはいかなる地名なるや　　答曰ふるたる

亜齊亜洲に属する地名ふして「ぷるしあ」といふ

ものゆへなるを支那ふたる百尔西亜とかるるう

問いはく又「いんでん」「むそこびや」などいふいんで

ん　答曰「いんでん」を印弟亜なり行元空は来「むそこ

びや」を没斯箇未亜なり魯西亜といふ大國は都の

有のり本国を歐羅巴の小島にあり長崎より
幕地産所をいふなり

○かるた

西いくゝワがほとて古来厨牌をもつてとふとふれたる婦
女子戯ぶかがるとあるうるしを蛮語なりといふ人
あるを考るうるしや
言て、くゝ彼西洋雅言「カルタ」といふを牌は牌と
りんゆ往昔洋紅毛くゝ来るゝ此諸を伝へ

しるや和蘭ゝ「すぺいるかるた」といふなり此余
梵漢諸異邦の言語ワが邦の常語となるもの物
りりゝ白石先生の東雅多りは
うかつ

○うなぎゆん　ぎやゆん

四ていけくうかのゝ。ぎやゆんといふ名あるを長いう
答曰かなのふる、ゝ瓦笠一属るは地名なりその
地に産るものゆゑ名あり西洋の雅名なり「え

ゆらてす」といひ和蘭語にて「ゆらふどすてぃん」と
いふ血石といふ者なり止血をもはいろ〳〵功能あり「ぎ
やゆん」を「ぢあゆん」とも「硝子類を彫鐫するか
ど此石を用ゆ一體玲瓏たる玉石なり別に譯說
あり摘芽は中に出る

○わふをいと　うすていち
ゆていたくあるをいと・かをていく・などいふ菓子もを
をていたく「あふをいと」を
と蜜製なりや

右に云ふ拂郎察といふ出法を砂糖は半なり半
名「あるをいと」といふ猶なり「うをていち」は本
名「うをていち・ぶろふど」なり「かをていち」を塩は半
「ぶろふど」を右に云ふたん半・ちく久しをうを
耐へるものをと軍陳長旅なとに用ゆるをも
とも

○わたんどふを
ゆくいたくあめんどふをといふものを飛ゆと蛮名あり

だしその説いろん
て世ろうあるものをうか船来の核仁なり和蘭の
名「あまんでるん」といふその詞を轉ぎるうり支那ム
てもも巴旦杏孟桃るどいふるう

○番南瓜

甲くいろく近年番南瓜ろく民間うて常食ものを
ものあり元ト地名なりといふ地方いばとう屬ちる
ものや　甲くいろく東蒲塞なるべし一名真

臘といふ印度ろう屬ちる地なり此瓜の種子むうう
ち地の產をそうろうもちを地畧を表猟
風土記といふ書ろう伴なう

○ほうとがう

甲くいろく俗ろう續隨子を「ほうとがう」といひ又拗波
ろうあ俗業ろうもかるとうの油といふものあり願くを
その正説を聞ん

答曰「ほうとがう」を和蘭ム和蘭ム地ろう西隅ろうある國ム名なり支那ム

て波爾杜瓦爾と音譯す本名「ぽるちがる」なりとぞむか
し此國の船多く渡りしところその國の
辭ども方々に傳りて今に殘れるもの「かつぱ」
「きつぽん」「いのんど」「ぺんていか」「ひりやうづ」此類
なるべし此ぽるとがる油とは彼國の名産にして
且その國人のはじめて持わたりしものゆゑその
國の名を冠りて称しきたるものと見ゆ此物をとこ
「おりいぶ」といふ木の實の汁をしぼりたる

油なり和蘭地方にても専ら薬用に供ふる油とな
る事なり此國にて胡麻油を使ふがごとし此油
の本名「おれうむ」又木の名を「おれいぬ」とい
ふなりとして其木の果を「おれいうむ」式
を「おれいふ」など書記したるものなり我
邦伊豆州にては「おれ細」記がりしくれぐくの
木と称するものあり此「おれといぬがうむ」の種類
なりといふ図を和蘭本草にあらはしてこゝに載するを

ほかべかづら之図
亦名「おもい葛」「ねくれ」のなまりおもし

おかゝ〜
連花實圖

野生
おもい草
枝条図

○こきんかよ

ていさく菓屋で「こきんかよ」和名海椰子とふ物きいうるものなり　若て曰こもこの椰子の一名なり「こけうを」とふ名ありてその枝ぎるかぐしを海椰子考といふ書を著してこれを詳にす

○もうてこぶ

四て曰もうてこぶといふものあり俗乃て武之角

楸といひ或ハ紅草ハ[illegible]のものといふ元蛮名か
まことにいぶかしくその説いうん
曰ハ瓦笠説
ものゝ「ちぶて」ハ木ハ事「こぶら」ハ地ハ事
和蘭訳ハ「ちゝんがゝと」といふ地木といふすし
唐ハ書ハ蛇皮木といふものこゝなるん今世ふて
ハ刻蛇木と称するものゝうち、角楸或ハ花ハを
「ちゝてこぶら」といひるるいるゆゑや

○ちやぼんん

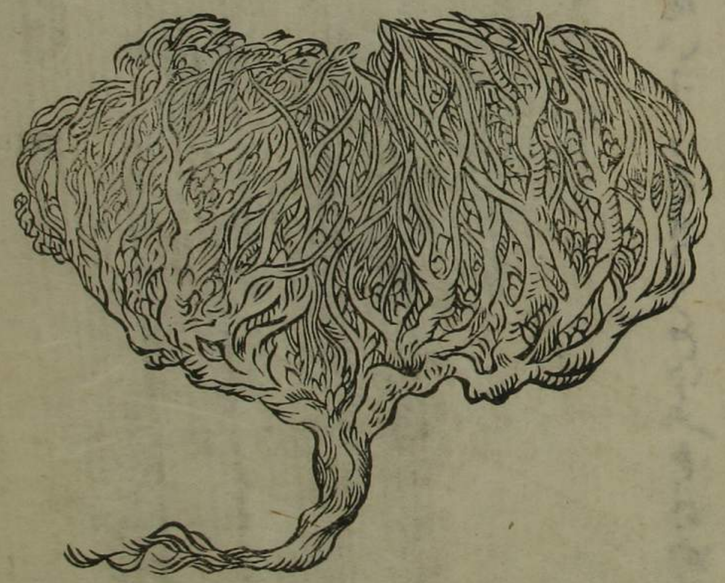
曰て曰石鹸をちやぼんといふ
言て曰ハ絵ハ西洋雅言ゝ「さぽ」といふの物を
ものゝ和蘭語ハそを「せいぽ」といふ物ハ薬用
ものゝ多く「せぷん」せいぽ」といふをはふなり

○安産樹

曰て曰世界ゝ安産樹といふものあり産ゝ時ハて
水ハ浸きゝ出産ハ生ゝ初ゝくといふいるる
ものゝ
言て曰ハ絵ハ亜蠟皮亜といふ

國の砂地に生ずるものを和蒜名を「ろんぎご」といふ漢名含生草なのといふ王元美・彙苑詳註婦人雜產に用ゐ含之立產又咽喉其汁一葉如卷柏而大生于韎鞨國其葉煮之不熟死毒とあり 西說を考るに後來此說のみとあれども和蒜本草より出るなり

安產樹



○てきめんていか

問曰「てきめんていか」といふものをいかなるや

答て曰是を樹乃脂なり此邦にも樅に未だ多くなる事なし品類二三種あり本名「てきめんじんちゆか」なり和蘭訳よく「てるぺんていん」といふなり

を精説を別に譯文あり

○色いけるばけもの

問て曰色いさゝだけものといふものあるいか

答て曰こんにゃく地黄

なるものなり

産出る国柴である」といふけだものあるを腹中

に入れる癖石なり呼んで「色いどうだである」

とふ「色いけるだけもの」をもて猪獣なり法獣

よりある癖石名その名あれども大抵此名を称

色支那にていふ鮓答なり牛黄鹿玉狗宝

赭母馬黒うか山類あり中にも

問赤類及を治功能等を摘芳中にあれども

詳にしるす

○ぼうとろ　　蓋し曰ふ牛乳し

岡曰がうとろとゝ行ぞや

別文邪　ふくいふ酪かう　歐羅巴ひと人常く食料

となせるものそけかもぐ功能あるものなり

蘭説辨惑巻之上畢